

慶應義塾大学学術情報リポジトリ  
Keio Associated Repository of Academic resources

Title	編集後記
Sub Title	
Author	平野, 裕之(Hirano, Hiroyuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院法務研究科
Publication year	2006
Jtitle	慶應法学 (Keio law journal). No.6 (2006. 8) ,p.492-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1203413X-20060815-0492">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA1203413X-20060815-0492</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## 編集後記

9月21日に、第1回新司法試験の合格者の発表があった。ついにこの日が来たのである。法務省のホームページではあいうえお順に大学が掲載されており、先ずトップバッターは愛知大学。18人中13人合格。さすが新司法試験、新堂先生から名刺を渡されて驚いたような大学でもこれほどかと感心。しかし、しばし順を追って見ていくと、18人中1人とか15人中1人とかいう悲惨な数字が目飛び込んできて、愛知大学の結果が驚異的なものであることによやく気がつく。と同時に、ローに行けばなんとかなるという考えが甘いものであることが現実を示されたことを実感する。これからは受験生の絞込みは更に激しくなるであろう。少人数であればよいというものでもないことも明らかになった。また、大学の序列そのままの結果であり、法科大学院の教育の差がどれほど反映しているのか疑問である。次第に予備校もノウハウをつけてくるはずであり、受験生も試験対策は予備校頼りになりかねない。ロースクール制度の意義が再び問われることになろう。

さて、われらが慶應大学法科大学院は164人中104人合格。健闘と評価できる数字であろうが、見てすぐの感想は「少ない」（予想よりは少なくとも20人ほど）というものであった。しかし、自分が何か寄与したわけでもないし、おこってもしょうがない。合格者数では全国3位と検討である。合格した卒業生には心から祝福の言葉を送りたい。と同時に、残念ながら不合格となった者は、苦しいであろうがあと1年がんばってもらいたい。択一段階で足りきされたうちの受験生は、164人中26人と多い。来年の択一の壁は今年よりもはるかに高くなるので、択一となめて油断するのは禁物である。旧司法試験とは異なり、新司法試験の択一問題は条文や判例の知識を確認するだけの素直な問題である。日ごろから地道に知識を詰め込んでいく必要があると同時に、法学学はいわば精密機械のようなものであり、1つ1つの正確な知識を積み重ねていかなければうまく機能しないので、正確さも要求される。

来年は、未修入学者が参戦する第1回目の試験であるため、ロースクール制度の真価が問われるといってもよい。第1回目の王冠獲得を捨てて自重した「眠れる虎」ともいうべき早稲田大学法科大学院がどれだけの合格者を出せるかも注目される。原則3年制を採用する大学の価値が問われるのであり、もしこれで結果がだせなければ、1年余計に時間と費用を費やすだけの法科大学院ということで、その評価は失墜しかねない。われらがKeio Law Schoolの卒業生が今年以上に健闘することを祈りたい。

(編集委員を代表して 委員長 平野裕之)